◆ かやぶき屋根プロジェクト

事業団体	（公財）横浜市ふるさと歴史財団
活用したふるさと文化財の森	朝霧高原茅場
活用したふるさと文化財の森センター	
活用した文化財建造物	

■事業の目的

大塚・歳勝土遺跡公園内の復元建物の修繕を、一般に公開することによって活動の周知を進めます。
屋根材の茅の刈り取りから修繕までできる人材を広く募集し、日常の修繕を実施します。
朝霧高原活性化委員会と連携、協力することによって茅や茅葺屋根に対する知識や技術の習得を目指します。

■事業の内容

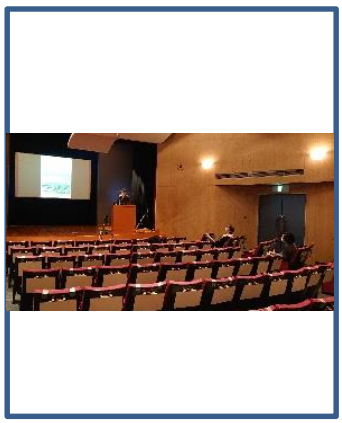
(1)　かやぶき屋根プロジェクトボランティアの募集と研修
　前年度の活動から引き続き令和2年度もチラシ・博物館HPを活用してボランティアの公募を実施しました。結果、前年度の5倍にあたる15名のボランティアに参加いただくこととなりました。新型コロナウィルス感染拡大の影響はあるものの、月1度程度のペースでボランティアの皆さんと活動しました。
　毎回の活動は簡易な活動報告を作成し、不参加のボランティアにも内容を知ってもらえるようボランティア全員へ送付しました。

(2)大塚・歳勝土遺跡公園の復元竪穴住居の修繕
　新型コロナウィルスの感染症の影響を考慮しつつ、大塚・歳勝土遺跡の復元竪穴住居の茅葺屋根の日常的な修繕を行うことができました(9月20日・10月31日・11月22日)。活動内容は抜けた茅の叩き込み・差し茅・屋根に積もった落ち葉等の清掃です。
　10月には茅葺職人の指導をいただき、参加者のスキルアップを実施しました。

(3)　朝霧高原茅場での茅刈り研修
　令和2年12月7日と令和3年3月13日(予定)、静岡県富士吉田市に所在するふるさと文化財の森設定地、朝霧高原茅場にボランティアとともに赴いて、研修および茅刈りを実施しました。参加ボランティアはいずれも研修に合格し朝霧高原茅場で茅を刈ることができるようになりました。

復元竪穴住居の修繕の様子

朝霧高原茅場での研修


シンポジウムの様子

絵本「かやぶきやねができるまで」表紙

(4)　動画配信
　新型コロナウィルス感染症の拡大防止のため、1月の活動はボランティアの参加を制限し、担当者のみで復元住居の清掃を実施しました。その様子を動画で記録し、横浜市歴史博物館のYouTubeチャンネルにて公開し、ボランティアへの周知を行いました。　https://youtu.be/Y5ik3iA8qhA
(5)　シンポジウムの実施
　これまでの「かやぶき屋根プロジェクト」の活動の中、同じように茅を活用する団体との交流が生まれました。令和2年度は自分たちのみならず他団体がどのような活動をしているのか、今後茅や茅葺屋根をどのように活用できるのかについてシンポジウムを実施しました。「かやぶき屋根プロジェクトの活動について」・「田舎モダンステーション　20年間空き家だったコミュニティスペース活用の今」・「われらが作るかややねプロジェクト」・「ふるさと文化財の森　朝霧高原茅場　と　朝霧高活性化委員会　の活動報告」の4件の活動報告の後、「かや　の活用とこれから」と題して討論・意見交換を実施しました。
　令和3年2月の実施でありこの時期は新型コロナウィルス感染症に伴う緊急事態宣言が発出されていたことから、無観客で開催しました。その内容は動画に収め後日横浜市歴史博物館のYouTubeチャンネルに公開しました。　https://youtu.be/MkG3cBh563E

(6)　絵本・報告書の作成
　文化庁及びふるさと文化財の森設定地へ送付する報告書を作成しました。
　茅や茅葺屋根を広い世代に伝えるために「かやぶきやねができるまで」と題した絵本を作成しました。
　絵本は茅と茅葺屋根について「かやぶき屋根プロジェクト」の活動を軸にわかりやすく表現しました。

■事業の成果

●前年に引き続きボランティアの皆さんより多大な協力を頂くことができました。
●茅葺屋根の日常的な修繕と材料となる茅の確保といった、活動のサイクルを確立することができました。
●シンポジウムを実施するなど他団体との交流・意見交換を深めたことで、次年度以降の活動について検討することができました。

■事業の実施後の課題

●令和2年度の活動は新型コロナウィルス感染症の影響もあり、当初の計画どおり進まない部分もありました。しかし、TwitterやYouTubeなどのネットメディアを活用することで、多くの人がアプローチできる場を増やすことができました。今後はより広く周知していくための方針を検討し、進めてまいります。

■今後の展開

●全国で活動している、茅や茅葺屋根を活用している団体との交流を増やしていくことで、ネットワークを広げていきたいと考えています。

◆「あなたの時間を有効に、伝統文化継承請負人になりませんか」
第1回茅刈後継者養成講座

事業団体	特定非営利活動法人 文化遺産保存ネットワーク河内長野
活用したふるさと文化財の森	岩湧山茅場
活用したふるさと文化財の森センター	滝畑ふるさと文化財の森センター
活用した文化財建造物	重要文化財左近家住宅

■事業の目的

修理用資材（カヤ・檜皮）の確保に対する地域での支援体制づくり
修理用資材（カヤ・檜皮）に関する効果的な普及啓発手法の開発

■事業の内容

(1) 茅場環境整備実習
■日時　：　令和2年10月3日（土）午前8時45分～午後4時
■会場　：　岩湧山茅場（大阪府河内長野市）
■参加者　:15名
■内容　茅場環境整備実習と言うことで、前日10月2日に事前準備し、10月3日に雑木処理の作業体験実施した。雑木は主に落葉低木の萩で、これは残ると茅刈取り時には幹が堅くなり、刈取りの邪魔となり作業効率を落とす。このため頻繁な除去作業が必要になる。
午前8時45分に参加者が集合、同9時に各自タクシー及び軽四トラックに分乗し茅場に向かった。同10時から茅場で茅刈入れ前の茅場の状況にについて説明を受けながら見学した。その後茅場整備の一環である雑木処理の作業手順・安全注意事項の説明を受けた。その後、各自安全距離を保ちながら実際に指導を受けながら雑木処理を体験した。作業は3時に終了した後下山し4時に解散となった。

茅場の説明

雑木処理の説明

雑木処理の体験

雑木処理の体験

(2)茅葺建造物見学
■日時　：　令和2年11月7日（日）午前11時30分～午後4時
■会場　：　日本民家集落博物館（大阪府豊中市）
■参加者　:申込者　30名
■内容　:大阪府にコロナ非常事態宣言発令され中止
(3)　講座及び茅刈実習
■日時　：　令和3年3月11日（木）午前8時45分～午後4時
■会場　：　岩湧山茅場
■参加者　：　12名
■内容　:当初令和2年12月19日（土）・12月20日（日）1泊2日で実施予定であったが、大阪府にコロナ非常事態宣言発令され中止とした。しかし、実施要望も多く、合せて幸いにも令和3年3月1日に大阪府は非常事態宣言が解除になったことにより、令和3年3月7日に感染予防の見地から宿泊は中止して日帰り実施しする予定とした。しかし、3月7日は前日の雨により茅が濡れたため作業できず、3月10日に事前準備し3月11日に実施した。

◆ 「あなたの時間を有効に、伝統文化継承請負人になりませんか」
第1回茅刈後継者養成講座

午前8時45分に参加者が集合、同9時に各自分乗し茅場に向かった。現地到着後、スケジュールの説明、作業手順、安全確保の説明を実施後作業に移った。午前11時まで作業し後12時15分まで摂南大学農学部浦出准教授よる「地域資産としての茅場のあり方」についての野外講演を行った。昼食後に午後1時より午後の作業を実施。午後3時に作業終了して下山を開始、午後4時に解散した。尚、今回は天候不順が続き、岩湧山での茅刈り日が直前まで決まらなかったので、一般参加者は少なく従事希望者が主となり実施した。

刈取り方法の説明

茅の刈取り体験

野外での講演

茅の搬出

(4)滝畑ふる森マップ
■部数　：　1000枚
■配布先　：当事業参加者及び関係者・滝畑ふるさと文化財の森システムセンター来訪者
■内容　岩湧山茅場・千石谷ヒノキ林周辺地形図及びふるさと文化財の森関係の解説書の改訂版

■事業の成果

●参加者を募集したところ一般・ヘリテージマネージャーに加えて茅刈り従事者希望者6名の参加があった。。
●今回取入れた茅場環境整備体験は、茅場維持をトータル的に進める上で重要なことであることを参加者が理解した。
●茅刈り従事希望者は、今回の目的である茅刈り採取の一連作業の中で、茅場環境整備と茅刈りまでの作業内容と手順を理解した。

■事業の実施後の課題

●事業については毎回であるが、現場での体験が主となり、昨今の天候不順により開催日の延期が重なり、開催日を平日に設定すると一般・ヘリテージマネージャーなどの参加が困難となり啓発目的の達成が薄らぐ心配がある。
●コロナ禍が継続する中での、事業開催の判断が難しかった。今後も三密を避けての開催に留意しなければならない。

■今後の展開

●茅刈り従事希望者の参加があり、今後は希望者に茅刈り採取に従事しながら、今回できなかった茅倉庫つくろい→茅場火入れ準備→茅場火入れ→火入れ後茅場整備作業の技能習得の講座を展開する。
●茅刈り従事者を養成するための講座が主であるが、やはり当初からの普及啓発目的もあることから、一般・ヘリテージマネージャー・建築関係者等も参加できるプログラムも加えて今後も進めたい。
●世界無形遺産に登録された「伝統建築工匠の技　木造建造物を受け継ぐための伝統技術」に茅採取が含まれていることから、これを活用して茅場の価値の向上と維持や茅刈り後継者の育成につなげたい。

◆　森が支える日本の技術2020公開セミナー

事業団体	公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会
活用したふるさと文化財の森センター	京都市文化財建造物保存技術研修センター
活用した文化財建造物	清水寺（境内）

■事業の目的

檜皮葺や柿葺、茅葺など古来から伝わる伝統的屋根工事技術は我が国が世界に誇る文化であり、これらの技術を後世に伝えることが伝統技術を保存する団体としての責務だと考える。そのためには、より多くの国民の理解を得ることが重要であり、文化財建造物保護のために必要な植物性資材の原材料作成及び使用方法（技術）や人材（技術者）の育成を中心に保存技術について広く一般の方々を対象に普及啓発を図る。当該事業を通じ、文化財保護における資材の重要性の意識を高め、知識習得の場を提供することを目的とする。

■事業の内容

■開催プログラム

（１）資材採取方法の実演、展示、研修

１　檜皮採取実演

日　　時　：　令和2年11月21日（土）10：00～15：00
場　　所　：　日吉大社　境内林（滋賀県大津市坂本5-1-1）
対　　象　：　一般参加者
内　　容　：　当会檜皮採取指導員による技術の実演
協　　力　：　日吉大社

檜皮採取実演

２　資材確保への取組（パネル展示）

日　　時　：　令和2年10月24日（土）9：30～16：00
場　　所　：　京都市文化財建造物保存技術研修センター
対　　象　：　一般参加者
内　　容　：　（公社）全国社寺等屋根工事技術保存会がこれまで行ってきた資材確保の取組とその資材の重要性を紹介。

パネル展示

３　資材を育む研修（森林整備：下草刈り）

日　　時　：　令和2年9月30日（水）13：30～15：30
場　　所　：　鞍馬山国有林（京都市左京区）
講　　師　：　林野庁　近畿中国森林管理局　京都大阪森林管理事務所　森林官
対　　象　：　文化財修理経験者
内　　容　：　昨年度植樹した檜木１００本周辺の下草を刈り、木の育成に良い環境作りと維持・管理していくことの意義を学ぶ。

森林整備：下草刈り

（２）「未来につなぐ匠の技」～伝統的屋根工事技法の紹介～
将来の担手養成に係る普及啓発

日　　時　：　令和2年10月24日（土）9：30～16：00
場　　所　：　清水寺特設会場
対　　象　：　一般参加者
内　　容　：　伝統的建造物を支えるための屋根工事技術の実演

清水寺特設会場内

（３）リーフレット等広報物の配布

本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により希望される方だけに配布。
主に日本人を対象とし、日本古来から伝わる伝統技術の説明リーフレットを配布。
さらに会場内にはモニターを設置し、技法紹介のＤＶＤ上映も行う。

清水寺境内特設テント

（４）特設HPの作成とSNSを利用した広報の実施

国内はもとより世界に国外に向けても発信するための取り組みとしてＳＮＳ（インスタグラム）も使用した。
各種プログラムの広報をネット媒体を使い実施することで、文化財や技術に関心をもつ人材の掘り起こしを狙いたい。

■事業の成果

本年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、海外の観光客は居ないなか国内の観光客も例年より少ない状況であったが、その分多くの情報を一般の見学者の方々に提供出来たと感じている。
その他、養成研修事業の公開、資材を育む研修（森林整備）のプログラムを実施。
良い資材を確保するための維持・管理、また技術者の養成、そして檜皮葺建造物を支える技術伝承の大切さを感じていただけたのではないかと思う。

■事業の実施後の課題

（１）プログラムの内容について
日本の文化や文化財、それを維持管理していく技術の大切さを本来もっと日本の人に理解してもらい守っていかなければならないと思う。
その維持管理していく事の大切さをどの様に伝えていくか引き続き実施内容を検討したい。

（２）場所の課題について
日本を代表する観光地でもある清水寺での事業は今後も望ましいが、天候やその他の条件に左右されない実地も検討したい。

（３）広報の課題について
特設ＨＰやＳＮＳ（インスタグラム）を使った広報を試み、また本年度は協賛の京都市教育委員会の広報にも紹介いただきました。
この事業を周知する方法として今後もご協力いただける様、地道に取り組んでいきたい。

■今後の展開

来年度以降も内容としては本筋は変わらず続けていきたいと考えている。普及啓発についてはセミナー以外にも当会独自の様々な活動を行っていることから、これ以上の拡大は考えていない。現在検討しているのは、清水寺会場では一定の成果は得られているが、より日本人向けに普及活動を行うために、セミナー会場も然りであるが、一般参加者の中でも対象となる年齢層を絞り込んだ宣伝広報や普及活動が必要であると考えている。
本年度の様な異常な事がいつ発生するかわからない時代。臨機応変な対応を心がけたい。

◆ 国宝・重要文化財建造物の修理と国産漆の使用100%化

事業団体　日本漆アカデミー

活用したふるさと文化財の森　浄法寺漆林

活用したふるさと文化財の森センター

活用した文化財建造物

■事業の目的

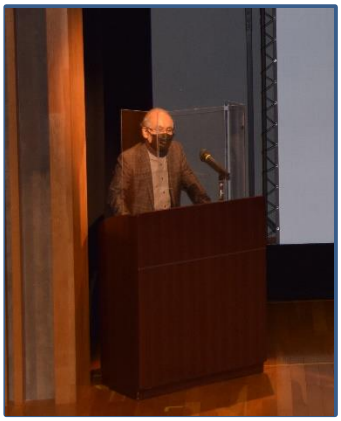
利用素材および漆掻き職人などによる講演会、ふるさと文化財の森（浄法寺漆林）の見学、オンラインによる漆サミット2020を行うことにより、これからの国宝・重要文化財建造物の修復と国産漆の使用100%化を図る

■事業の内容

(1)　国宝・重要文化財建造物の修理における利用素材の講演会
10月17日（土）午前に新型コロナウイルス感染症の影響が少ない二戸市シビックセンターで国宝・重要文化財建造物の修理における利用素材の講演会を行った。講演会では「日光の建造物漆塗りと劣化」を公益財団法人日光社寺文化財保存会漆塗管理技術者佐藤則武氏が、「文化財建造物における修理用資材としての漆液の有為性」を建築装飾技術史研究所所長窪寺茂氏が講演した。

(2)　浄法寺漆林の普及啓発を図る漆掻き職人などによる講演会浄法寺漆林の見学
利用素材の講演会の後、二戸市シビックセンターで午後に漆掻き職人などによる講演会を行った。講演会では「福島県における漆掻きの現状と課題」をet craft代表平井岳氏が、「山形県の漆掻きの現状と問題点」を漆工房学代表佐藤学氏と山形うるしの会事務局中村人史氏が、「弘前市における漆掻きの現状と課題」を伝統工芸士今年人氏が、「浄法寺漆の特性と評価」を（地独）岩手県工業技術センター上席研究員小林正信氏が講演した。講演修了後、利用素材の講演会の講演者と漆掻き職人などによる講演会の講演者によるパネルディスカッションを行い、修理用資材としての漆やそれを採取する漆掻き職人の現状や課題などについて参加者と議論し、情報を共有した。18日（日）は当初、浄法寺漆共進会（品評会）を見学する予定であったが、岩手県や青森県の一部しか参加できなかったため、共進会への参加を諦め、共進会に参加できない人を対象にふるさと文化財の森浄法寺漆林を見学した。浄法寺漆林の見学では浄法寺漆林での「萌芽更新」を森林総合研究所東北支所田端雅進氏が、「ウルシのさし木」を森林総合研究所林木育種センター東北育種場井城泰一氏が解説し、今後のウルシ林造成に向けて参加者と情報共有した。

講演を行う佐藤則武氏


講演を行う窪寺茂氏

講演を行う今年人氏

ふるさと文化財の森見学

(3) オンラインによる漆サミット2020
漆サミット2020は当初、明治大学と日光東照宮で11月20～22日の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、オンラインで11月21日（土）だけの一日に短縮・開催した。漆サミット2020では午前に講演会「国産漆の使用100%化を目指したウルシ林造成」を開催し、「ウルシ遺伝資源評価は何をもたらすのか？蓄積された過去の財産を将来に伝えるために」を九州大学農学研究院准教授渡辺敦史が、「土の状態から考えるウルシの植栽適地」を森林総合研究所東北支所主任研究員小野賢二氏が、「ウルシ種子の発芽促進処理法の改善」を東京大学農学生命科学科教授福田健二氏が講演した。その後、「漆」をめぐる学際的な最新の研究成果等に関わる6件のポスター発表が行われた。午後は講演会「ウルシ資源を活かした地方創生の取組」を開催し、「木曽漆器産地との共同プロジェクト『木曽漆器の箸』『かしだしっき』について」を筑波大学芸術系准教授宮原克人氏が、「輪島市での取組」を輪島市漆器商工課漆器産業振興室長細川英邦氏が、「喜多方・会津若松市における漆資源を活かした地方創生の取組」を会津大学短期大学部教授井波純氏が、「『工藝の森』行為循環型モノづくりで漆を支える磁場をつくる」を一般社団法人パースペクティブ共同代表松山幸子氏が講演した。その後、講演会「国産漆の使用100%化を目指したウルシ林造成」の講演者と講演会「ウルシ資源を活かした地方創生の取組」の講演者によるパネルディスカッションを行い、森林総合研究所東北支所田端雅進氏の進行で国産漆使用100%化を目指したウルシ林造成やウルシ資源を活かした地方創生について講演者と議論した。その中で、今後のウルシ林造成に向けたウルシ遺伝資源管理、植栽適地、実生苗育成のための種子の発芽促進処理および木曽漆器産地、輪島市、喜多方・会津若松市、京都府京北地域での地方創生の現状と課題について講演者および参加者で情報共有した。

■事業の成果

●利用素材の講演会、漆掻き職人などによる講演会、浄法寺漆林の見学およびオンラインによる漆サミット2020を行うことにより、修理用資材としての漆やそれを採取する漆掻き職人の現状や課題について議論を深めた他、ウルシ林造成に向けた遺伝資源管理、植栽適地、ウルシ種子の発芽促進処理法および木曽漆器産地、輪島市、喜多方・会津若松市、京都府京北地域での地方創生の現状と課題などについて情報を共有した。
●国宝・重要文化財建造物の修理における浄法寺漆など国産漆の需要が増加し、国産漆の安定的な確保が期待される他、参加者に浄法寺漆林や漆掻き職人の必要性を理解させることができた。

■事業の実施後の課題

●国宝・重要文化財建造物の修復のため、ニホンジカや疫病被害の防除を行い、全国的に健全なウルシ林の造成や良質な漆を生産する他、今後も国産漆の特性評価や漆掻き職人の育成が重要な課題である。
●新型コロナウイルス感染症が拡大する中、一般の方に国宝・重要文化財建造物の修復や伝統工芸の良さを広報し、漆塗りなどの技術継承を行いながら、地方創生を図っていくことが課題である。

■今後の展開

●日本漆アカデミー主催のオンラインでの開催も考慮し、講演会やセミナーを行う他、ワークショップや見学などを行うことにより、国宝・重要文化財の修復などに不可欠な国産漆を普及啓発する予定である。
●今後、二戸市やNPO法人などと協力し、疫病やニホンジカの防除などウルシ林造成に関する講演会、漆掻きの見学、漆塗り体験のワークショップを行うことにより、国宝・重要文化財建造物の修復に欠かせない浄法寺漆林、伝統技術である漆掻きおよび漆塗職人の現状を発信する予定である。

◆　「漆文化を守る」普及啓発事業

事業団体	日本うるし掻き技術保存会	**■事業の目的**
活用したふるさと文化財の森	浄法寺漆林	・修理用資材の確保に対する支援体制づくり ・修理用資材に関する効果的な普及啓発手法の開発 ・修理用資材の育成・採取・加工に関する活動 ・修理用資材の育成・採取・加工に関する担い手の確保 ・修理用資材の育成・採取・加工に関する他組織との連携・情報共有
活用したふるさと文化財の森センター		
活用した文化財建造物	日光東照宮※、二荒山神社※、日光山輪王寺※、八葉山天台寺 ※新型コロナウイルス感染拡大の影響により活用断念	

■事業の内容

(1) 浄法寺漆共進会及び文化財講演会、浄法寺漆林の見学

実施日　　令和2年10月18日（日）

①漆産地ツアー（日本一の漆の郷にのへ　　浄法寺漆産地めぐりモニターツアー）

参加数　　10名（一般募集）

行　程　　盛岡駅＝＝漆共進会（見学・講演）＝＝ふるさと文化財の森（漆林・漆掻き見学）＝＝天台の湯（昼食）＝＝浄法寺歴史民俗資料館（見学）＝＝天台寺（見学）＝＝滴生舎（見学・買い物）＝＝なにゃーと物産センター（買い物）＝＝盛岡駅

その他　　アンケート実施

②浄法寺漆共進会　特別講演

会　場　　二戸市浄法寺文化交流センター・Jホール

表　題　　「日光の建造物で使う漆」

講　師　　公益財団法人日光社寺文化財保存会　　佐藤　則武　氏

協　力　　岩手県浄法寺漆生産組合、岩手県二戸市

内　容　　文化財修復の立場から見た浄法寺漆とは、修復作業に適した漆とは、日光二社一寺修復のこれまでとこれからについてご講演いただく。

漆共進会見学の様子

漆掻き実演の様子

講演の様子

◆　「漆文化を守る」普及啓発事業

(2)　漆掻き技術のPR及び漆を知るワークショップ　【コロナの関係により中止】

実施日　令和3年1月16日（土）～17日（日）
会　場　日光東照宮、二荒山神社、日光山輪王寺
目　的　浄法寺漆の最大供給地である日光東照宮他において、浄法寺漆の採取方法や活用方法などの知識のほか、漆掻きの実演やワークショップを通じて、日本の歴史と文化を支える文化財建造物の保護における漆の役割などを来場者に対してPRする。
内　容　①漆掻き実演、②ワークショップ（金箔押し、漆椀塗、漆のストラップ艶出し体験）③PR動画放映、④道具等展示によるPR

(3)　保存修理現場見学　【コロナの関係により中止】

実施日　令和3年1月18日（月）
会　場　日光二社一寺内保存修理現場
目　的　保存修理現場見学や修理を行う漆塗り技術者と修復に適した漆の品質等について、情報や意見交換を行い、漆掻き技術の向上につなげる。

■事業の成果

●漆産地ツアー　・・・　ツアー参加者のほとんどが、ふるさと文化財の森について認識されていなかったが、本ツアーを通じて理解を深めることにつながった。中には、県内の他のふるさと文化財の森を見てみたいと強く興味を抱いた参加者もおられた。
●特別講演「日光の建造物で使う漆」　・・・　修復における浄法寺漆の使い勝手や修復に適した漆についてご講演いただき、今後の漆生産における技術向上の必要性を感じる職人もおり、貴重な機会となった。
●漆掻き技術のPR及び漆を知るワークショップ　・・・　イベント開催地である栃木県における新型コロナウイルス感染症感染拡大による緊急事態宣言の発令を受け中止とした。展示パネルや配布予定のリーフレットは漆関連施設や観光施設において展示及び配架し普及啓発に努めている。

■事業の実施後の課題

漆に関心が高まる中、漆林や漆掻きの見学希望者が増加傾向にあるが、漆掻きのシーズンである6月から11月は、見学希望者へ漆掻き職人自らが対応することが困難である。見学対応には漆掻き作業を中断しなくてはならないが、生産量は所得に直接影響を与えるため対応が困難な場合が多く、対応可能な人材の育成を含めた受け入れ体制の整備が課題となっている。

■今後の展開

令和２年6月に、二戸市と八幡平市に流れる安比川流域における漆文化が日本遺産に認定となり、同年12月には、当会が保有する漆掻き技術を含む「伝統建築工匠の技　木造建造物を受け継ぐための伝統技術」が国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録され、当地域は漆振興の機運も高まっている。

また、二戸市に隣接する御所野縄文遺跡は「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の一つとして世界遺産の登録を目指しており、同遺跡から漆がついた土器の一部が出土するなど二戸地域と漆との関りが深いことから、世界遺産や日本遺産の各事業と連携しながら、ワークショップやツアーなどを通じ普及啓発を図っていきたい。

さらに、日光二社一寺をはじめ、世界遺産や国宝・重要文化財の指定を受けている地域において、漆掻き実演や体験、ワークショップなどを通じ普及啓発を図っていきたい。

◆ 筑波山麓の茅の育成・採取・加工に係る普及啓発事業

事業団体	一般社団法人日本茅葺き文化協会	**■事業の目的**
活用したふるさと文化財の森	高エネルギー加速器研究機構茅場	○修理用資材の確保に対する支援体制づくり ○修理用資材に関する効果的な普及啓発手法の開発 ○修理用資材の育成・採取・加工に関する活動 ○修理用資材の育成・採取・加工に関する担手の確保 ○修理用資材の育成・採取・加工に係る他組織との連携、情報共有

■事業の内容

(1) 茅（ススキ）の育成・採取・加工等の研修プログラム

①-1茅葺き体験研修　日時　2020年10月3日（土）、4日（日）　**会場**　常陸風土記の丘　**参加者**　53名（のべ106名）

参加者は、20代の大学生が約半数で、遠くは和歌山大学からも参加。他には、茅葺きを自分で直したい、つくりたいと思う人、地元の有機農家、建築家、地元住民、学園都市住民、他地域の行政担当者、茅葺き職人見習い、茅刈り手を目指している人など多様。常陸風土記の丘にて、竪穴住居の葺き替えを筑波流茅手の88歳のベテラン職人の廣山さんをはじめ、常陸風土記の丘の職人による指導のもと行った。まず茅葺きの準備作業として元々は家人が行う、こまるきと呼ばれる茅ごしらえ（茅の加工）、下地の竹割りを行い、縄結びの特訓から。次に、屋根葺きとして、茅の並べ方、茅を押さえる竹「押しぼこ」の縄の結び方、締め方、足場丸太の取り付け方を学んだ。

①-2茅葺き見学研修　常陸風土記の丘歴史探索　日時　2020年10月4日（土）　**会場**　常陸風土記の丘　**参加者**　53名

歴史ガイドの案内の元、施設内の古代遺跡、縄文・弥生時代の竪穴式住居などの歴史をテーマに見学研修が行われた。施設内に貝塚があり、この地が以前海であったことも教わった。また、施設内の茅葺きの建物全ては、後継者育成事業で技術を習得した施設の職員が職人として、地元職人の協力のもと葺き替えが行われている。

②茅刈り体験研修　日時　2020年12月19日（土）　**会場**　高エネルギー加速器研究機構茅場（ふるさと文化財の森）　**参加者**　50名

参加者は、茅葺き体験研修と連続参加が中心で、20代の大学生が約半数。地元の有機農家、建築家、地元住民、学園都市住民、他地域の行政担当者、茅刈り手を目指している人など多様。茅葺き研修から継続して筑波流茅手の廣山さんをはじめ、常陸風土記の丘の職人と地元やさと茅葺き屋根保存会の指導のもと茅刈り研修を行った。よい茅の見分け方、刈り方、束の大きさ、束ね方、茅の単位、運搬、鎌の研ぎ方とあわせて、刈った茅束を屋根に葺くための茅ごしらえ（こまるき）について学んだ。

③茅の育成・採取・加工等に係る講義　日時　2020年10月3日（土）、2020年12月19日（土）

会場　常陸風土記の丘研修室、筑波交流センター会議室　**参加者**　茅葺き文化講座1　53名　茅葺き文化講座2　50名

座学、茅刈り、茅葺きの一貫した研修を行うプログラムとして、茅葺き研修とあわせて、筑波大学名誉教授の安藤邦廣代表理事が「筑波流茅手の技とその風景」の講義を、茅刈り研修とあわせて、筑波大学生命環境系の廣田充准教授が「茅と茅場：茅の持続的生産に向けて」の講義を行った。

(2)茅の育成・採取・加工等に係る記録　日時　2020年7月～2021年3月

筑波山麓の茅葺きと技の記録と、高エネルギー加速器研究茅場、浮島の茅場、上之島の茅場にて、ヤマガヤとシマガヤの記録を行い「茨城の茅葺き-茅場と茅刈り-」冊子（英訳付き）を作成した。これらを、ふる森選定地のほか、筑波山麓地域自治体、教育委員会、研究関係機関、茅葺き職人連合、国際茅葺協会等に配布し、普及啓発と担手養成用の教材として活用する。

茅葺き体験研修

茅葺き見学研修

茅刈り体験研修

茅葺き文化講座

■事業の成果

（1）茅の育成・採取・加工等の研修プログラム

①茅葺き体験研修、茅葺き見学研修（常陸風土記の丘歴史散策）

1　筑波山麓の茅葺きの技と材料の理解　常陸風土記の丘の竪穴住居の葺き替え現場にて茅葺き研修を行った。茅ごしらえ、縄の結び方、下地の竹割り、下地の補修方法、茅の運搬、茅並べ、押しぼこのとりつけ、叩き、の一連の茅葺き作業を体験することで、筑波山麓で使われる材料と茅葺きの技について学ぶことができた。

2　茅の加工の習得　筑波流の茅葺きの特色のひとつである、茅の加工として、切り茅をこまるきする（小さく束ねる）胴切りの茅ごしらえについて、その技能の研修を行うとともに記録を作成して、茅葺き所有者の次の世代や一般市民や学生にそれを伝えることで、担い手育成の一助とすることができた。

3　技能の継承と技術交流　茅刈り研修とあわせて茅葺き研修を行うことで、茅ごしらえした胴切りの役割と使い方を学び、それを体験研修することで、筑波流茅手の技能の継承とともに、参加した他地域の茅葺き職人との技術交流をすることができた。

4　担い手育成　茅葺きおよび茅刈り研修に参加した大学生のうち2名が、卒業後の進路に茅葺き職人を志望し、担い手育成につながる。

◆　筑波山麓の茅の育成・採取・加工に係る普及啓発事業

■事業の成果

②茅刈り研修

1　茅採取技能の理解　筑波山麓地域の茅採取技能について、屋根葺き材料として良質な茅を採取するための適期、選別方法、採取の方法、束ね方、束の大きさ、乾燥方法、茅場の環境とその維持管理について学ぶことができた。

2　茅刈りの担い手育成　今回の茅刈り研修の参加者は、はじめて茅刈りをする者が62％であった。その動機として、「茅刈りをしてみたい」が最も多く、「茅場の環境や維持管理について知りたい」が次に続いた。茅葺き、茅刈りとあわせて体験研修をすることで、参加者は「他の地域の茅刈り茅葺きについて知りたい」と期待しており、この研修の満足度と理解度も高く、これからの担い手育成につながることが期待できる。

3　収穫量　参加者らによって15駄、90束（5尺締め）の茅刈りを行うことができた。

③茅の育成・採取・加工等に係る講義　（茅葺き文化講座）　当会代表理事　筑波大学名誉教授　安藤邦廣「筑波流茅手の技とその風景」

1　持続的な農業が営まれてきた筑波山麓地域　筑波山は松山で、燃料、建築用材としてマツが地域の資源の基盤となってきた。この松山と茅場から得られるマツと茅（ススキ）という資源が持続的な農業を営んできた大きな背景である。

2　屋敷林といぐねに囲われた茅葺き　防風と用材確保のための屋敷林、敷地や建物を守る防風、防火のカシ、モチのいぐね、それらに囲われて、主屋、書院、倉、納屋、門など、複数の茅葺き建物が建っている。
屋敷林といぐねに囲まれることによって、庭に開かれた開放的なつくりができている。

3　筑波流茅手の技　トオシモノと呼ばれる3～9層に重ねて葺かれる軒付け、キリトメと呼ばれる各職人独自の技巧が凝らされた棟仕舞をはじめとし、高い技術を誇る筑波流茅手によって、筑波山麓地域の茅葺きはつくられてきた。

4　筑波山麓の茅場　1軒の茅葺き全てを葺き替えるのに必要な茅の量、茅場の面積は約1町歩（1ha）。20～30年の耐久性があることから、1町歩の茅場で20～30軒が共同利用できる。1軒あたり2～3反歩の茅場が必要で、1町歩を順番に共同利用するか、分割して各家で利用する。かつては集落の近くに茅場があったが、ほとんど消失した。今は高エネ研の茅場がこれらを支えている。霞ヶ浦周辺では、シマガヤと呼ばれる水辺に生えるカモノハシ、クサヨシを利用していた。

筑波大学生命環境系　廣田充准教授「茅と茅場：茅の持続的生産に向けて」

1　草原の高い炭素蓄積能力　草原の二酸化炭素吸収機能は、森林に匹敵する炭素蓄積量である。草原では植物の体は小さいため、植物に蓄えられる量よりも土壌が炭素をたくさん蓄えており、草原は日本のみならず世界的にみても、炭素を蓄える機能が非常に高い生態系だということがわかっている。

2　日本の土壌に炭素が貯留しやすい理由は黒ボク土　日本の土壌に炭素が貯留しやすい理由は、日本の草地に多い黒ボク土が炭素を蓄積することに貢献しているからである。黒ボク土は火山灰とイネ科の植物の遺骸によって長い時間をかけて生成される。草原の管理をやめて放置し森林化が進んだ場合、黒ボク土の色が薄くなり、森林褐色土となり、土壌の炭素の含有量は少なくなる。

3　茅、ススキの特徴　ススキは生育に必要な窒素量が少なく、ほとんど栄養を使わずに生育し、むしろ貧栄養下のほうがよく育つ。一般的な森林、草原のPHは4.5～5.5で、ススキは5.5～6に分布している。セイタカアワダチソウなどはさらに高い6、つまりアルカリ性側に分布している。つまり、ススキはリン濃度が低い貧栄養で酸性の土壌を好む特性がある。

4　高エネルギー加速器研究機構茅場での茅刈り適期の確認　9月より茅刈り時期の12月、茅刈り後に継続して、茅場の状況、茅の質、生育状況に関する違いの観察を、筑波大学の研究者と共同で実施した。青刈りになっているのではないかと心配していた茅刈り時期については、12月下旬であれば、十分枯れ落ちていることがわかった。

5　茅場の土壌環境　高エネルギー加速器研究機構茅場の土壌環境は造成地のような土壌であること、PH値が6～7で、茅（ススキ）に適した環境からややずれて中性化してきており、他の外来植物が好む環境になっていることなどによって、茅が生育している面積が減少してきている可能性があることが明らかとなった。この茅場に発達した有機物の黒ボク土の層は見られなかった。

6　茅の生産量と質が急激に低下している要因　上記の他に、茅の生産量と質が急激に低下している要因として、以下の3つの可能性があることが明らかになった。1）茅をずっと刈り取っているから茅が退化した　2）自家受粉が多いことによって個体群が弱くなった　3）土壌が富栄養、あるいは貧栄養になっているなど、なんらか土壌が改変していることで退化した。

（2）茅の育成・採取・加工等に係る教材の作成・配布

筑波山麓の茅場と茅刈り（茅採取）の技と知恵の記録を行い、それらを「筑波山麓の茅葺き　茅場と茅刈り」冊子（英訳付き）として教材を作成した。これらを、ふる森選定地のほか、筑波山麓地域自治体、教育委員会、研究関係機関、茅葺き職人連合、国際茅葺協会等に配布し、普及啓発と担手養成用の教材として活用する。

■事業の実施後の課題

1　体系的な研修プログラム　座学、茅刈り、茅葺きの体系的な研修プログラム開発が必要。この研修事業を担い手育成につなげることができる。

2　他地域の茅（ススキ）の播種　茅の生産量と質が急激に低下している要因として、自家受粉が多いことによって個体群が弱くなった可能性があることに対して、他地域の茅（ススキ）の種を蒔き、ススキの生育を促す方策を探る。

3　茅場への施肥試験の実施と茅場の再生、持続的生産へ　茅場および茅の質と生産量の低下の環境要因のいくつかの可能性が明らかになった。それを明確にするために、土壌環境の変化、茅場の劣化に対して、野焼きが有効であるが、高エネルギー加速器研究機構茅場は研修所内の茅場という性質から、野焼きができない。それに代わる対策として、来年度は茅場の一部に、不足している可能性のあるケイ素を添加するケイ酸カリウムの施肥試験、および、土壌の中性化解消のための塩化アルミニウム六水和物の添加試験を行い、その効果を計測して茅場の土壌改善、ススキの生育を促す方策を探る。

■今後の展開

1　継続した研修プログラムの実施　多くの茅葺き民家を所有している常陸風土記の丘では、今回のような茅葺きの体系的な研修プログラムを取り入れることで、より参加型の教育プログラムを実施できることが望ましい。継続してこれを発展することで、より多くの茅葺きの葺き替えにおいて、市民が参加すれば、教育プログラムとしての効果もあり、文化財の理解を深める上でも効果的である。これを今後積極的に取り入れることが望ましい。